

感情の自然化はいかなる意味で可能か？...
第40回大会 (2007年) ワークショップ記録III

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 柴田, 正良, Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11824

ワークショップ「感情の自然化はいかなる意味で可能か？」

柴田正良（金沢大）

本ワークショップは、感情の自然化に関する問題をめぐって、心理学（大平英樹氏：名古屋大学）、工学（月本洋氏：東京電機大学）、哲学（伊藤春樹氏：東北学院大学、長滝祥司氏：中京大学）の各分野から問題提起をしてもらったものである。コーディネーターと司会は柴田正良（金沢大学）が務めた。

本ワークショップの狙いは、従来の心の哲学、心理学、人工知能研究などから取り残された感のある感情という現象が、どのような範囲と条件の下でなら自然科学的な説明に回収できるか、という問題をできるだけ具体的に議論することであった。つまり、一言でいえば、現象的意識やクオリアに関してよく主張される説明ギャップが感情の場合にはどのような形で生ずるのか、あるいは生じないのかということの解明である。ちなみに、大平氏を除く発表者のすべてが、2008年3月に刊行された『感情とクオリアの謎』（長滝・柴田・美濃共編著、昭和堂）の執筆者であり、それゆえこのワークショップは、その時点（2007年11月）ですでに完成されていたこれらの原稿に対する「事前合評会」の様相も帯びていた、ということも併せて記しておきたい。

各発表者による発表内容の詳細は紙幅の関係から割愛させて頂き、全体の議論の方向と今後の展望を司会者の観点から述べたいと思うが、各発表の要点をまず確認しておきたい。「脳－身体の機能的関連としての感情」を発表した大平氏からは、スピノザ、W. ジェームス、A. ダマシオと続く「身体状態の観念としての感情」という発想に実験的なデータの実証を与えるという観点から、脳と身体の変化の同時観測から得られるさまざまな貴重な知見が披露された。「感情のシミュレーションについて」を発表した月本氏からは、ニューラルネットワークと遺伝アルゴリズムを用いて（感情の進化に関する一つの仮説をもとに）作成された感情のコンピュータ・シミュレーションの実物の提示とその説明が、かなり慎重な口ぶりで紹介された。というのは、「作成されたものは本当に感情なのか？」という当然の疑問が期待される場所であったが、月本氏の用意周到な「自己点検評価」があらかじめその疑問を封じ込めた形となったからである。自然化可能性の問題をもっとも哲学的にストレートな形で受けとめたのは、「クオリアの自然化はどの程度可能か」を発表した伊藤氏である。伊藤氏は、ここで「自然化」を「脳をその枢要な一部とする身体の物質状態に還元すること」と解した上で、この意味でのクオリアの自然化の可能性を論じ、クオリアを有名無実化する「戦略的無関心主義」を展開した。これに対してややソフトな形で感情の自然化の論点を説いたのは、長滝氏の〈感情と身体の関係性の新たな問い直し〉である。長滝氏は、自然主義と反自然主義のどちらか一方がすべての真理を握っているわけではないとした上で、両者を調停する視点を与えるものとして「身体概念の再考」を提案し、歴史的なプロセスと人称性という2つを再考のための具体的な手がかりとして提

起した。

全体を概括すれば、発表者の方々の熱意あふれる発表に 대응することができず、やや散漫な形で低調なワークショップを進行させてしまった、というのが司会者の自己反省の弁である。

それにはいくつかの要因があるが、一つには、(1)会場全体の雰囲気として、身体機能や脳機能の生理化学的な解明による「感情の自然化」にはとくに問題はないという理解があり、これに引きずられて議論の焦点をぼやけたままにしてしまったことである。つまり、記憶や学習といった他の認知機能と比較して、なぜ感情には自然化に関する独特の問題があるのか、という論点を顕在化させられなかったことである。この点では、「規範意識や道徳感情の自然化こそ問題にすべきだ」という声が会場からあがったのも当然である。

第二は、(2)クオリアの自然化に関しては、やはり「感情の自然化」というタイトルが災いしてか、クオリアの還元主義の議論を先鋭化させるに至らなかったことである。つまり、<感情ゆえのそのクオリアの独特性>の議論を進めるのか、クオリアの還元主義の議論を進めるのか、その間でいささか議論は方向性を見失ったように思われた。閉会後の会場からの指摘にあったように、これについては、いっそ「人工のクオリアは可能か」という問題を立てた方が議論は深まったように思われる（実際、先に触れた『感情とクオリアの謎』では、座談会において人工のクオリアの問題が集中的に議論されている）。

さて要因の第三は、(3)今後の展望とも関わるが、哲学者たちにとって、「感情の自然化」ならぬ「感情の理論」にどう向き合っているのかがまだ判然としていない、という点だと思われる。あるいは、哲学者たちは自分たちをいまだに「感情の理論」の受け手としてのみ考えていて、作り手としてどう寄与できるのかは視野の外にあるように見える。それゆえ、感情の自然化は、哲学の文脈における自然主義の話題の一つに留まり、感情という独特の現象の個別の解明を動機づけるものとして、会場でとくに取り上げられるには至らなかったのである。しかし、今後、このような個別の理論への哲学の寄与を積極的に追及しない限り、哲学的解明の土壌は痩せ細っていくばかりではないかと思われる。

とはいえ、以上のような事情をあらかじめ予見できたにもかかわらず、当日のワークショップでそれを生かせなかったのは、ひとえに司会者の責任である。捲土重来を期しつつ、発表者と会場のみなさまにお許しを乞うばかりである。